

●2013.5に、スコット・マクナイト師の「福音の再発見」という本がキリスト新聞社から翻訳出版されました。現在用いられている「福音」という言葉は、イエスや使徒たちが意味していた本来の福音をもはや指すものではなくなってしまったと警鐘をならして、イエスの語った「福音」に焦点を当てています。彼によれば、「福音とはイスラエルの物語を完成させるイエスの救いの物語であり、イエスは明らかに、イスラエルを救う神のご計画の中心に自分を据えていた。」と述べています。別の表現をするならば、「福音とは、イスラエルのメシアであり、すべてのものの主であり、ダビデの裔(すえ)である救い主イエスの、その救いの物語によって完結するイスラエルの物語である」としています。コンパクトにパッケージ化された福音—「個人的な救い」—が強調されることで、神のご計画全体に関心がいなくなっていることが実は問題なのです。初代教会が伝えた「使徒的福音」、換言すれば、ユダヤ的ルーツをもった福音に立ち返るように促しています。



使徒パウロたちの語った「福音」

●初代教会が「福音」として語ったのは、私たちが理解している「福音」とは少々異なります。初代教会が語った「福音」とは、「イエスがキリスト」であるという良きおとずれです。初代教会の宣教とはそのことを聖書(私たちのいう旧約聖書)に基づいて立証することでした。「イエス」、その方こそ「良き知らせ」だったからです。私たちがしばしば口にする「イエス・キリスト」とは、イエスがキリストであるという信仰の告白です。「イエス」はこの地上に実在した「ナザレのイエス」のことです。この方の生涯のすべて、語ったことのすべて、また、なされたことのすべてが約束されたメシア、すなわちキリストであることを聖書自らが証しているという告白です。「キリスト」は「油注がれた者」という意味で、これは名前ではなく職名です。

●使徒パウロはダマスコ途上でイエスと出会った後、目からうろこのような物が落ちて、イエスは神の子であり、キリストであることを確信しました。そしてそのこと(イエスがキリストであること)を証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせました(使徒 9:22)。イエス・キリストであることを証明する場合、それは必ず「聖書に基づいて」なされたのです。

●このことは、イエスが十字架にかかる前も復活した後にも、全く同じことが繰り返されています。イエスがエルサレムに向かって行く時、弟子たちに「人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられ、むちで打ってから殺します。しかし人の子は三日目によみがえります。」と語られました(ルカ 18:32~33)。しかし、このことを理解した弟子たちはひとりもいませんでした。復活されたイエスがエマオの途上の弟子たちに近づいて、キリストは栄光を受ける前に苦しみを受けるということを、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中でそのことを説き明かされました。それを聞いていた二人の弟子たちはこのとき「心が燃える」のを感じていました。そのあとに彼らは目が開かれ、「イエスこそキリスト」なのだということを悟るようになったのです。

●使徒パウロはコリント人への手紙第一 15章 3節で「福音」についてのべています。そこでは最も大切な事として「イエスがキリストである」という前提で語っています。その核心にあったのは「聖書の示すとおり」だったことに注目しなければなりません。使徒たちの語る福音は、イエスのストーリー(イエスの全生涯の事実)が、イスラエルのストーリーの成就であるという良き知らせだったということです。「キリスト」ということばそのものが、実はイスラエルの歴史を背景とした語彙なのです。

●パッケージ化された個人的な救いの強調は、「神のご計画の全体を、余すところなく知る」(使徒 20:27)ことよりも、救いが人間のニーズに終始してしまうという懸念があるのです。